

NPO 法人マザーズサポーター協会では、納得のいく「今」を生きるために、お役に立つ情報を発信しています。

このニュースレターが発行されるのは2022年。原稿を書いている今とは数ヶ月のタイムラグがあるわけですが、ほんの少し先の見通しも難しい昨今、果たして世界はどのような状況になっているのやら……。今回は愛知県在住の岡本が担当いたします。

“贈与”という概念を知って

■これまでの人生を振り返る

ニュースレターの原稿執筆のお話をいただいてからというもの、通勤中や家事をしながら、そして就寝前にも、私は真剣に考えた。「果たして私のマインドや状況を大きく変えた関わりを誰かにしてもらったことが過去にあったらどうか？」または「自分自身が、他者の状況を明らかに変えるような関わりをしたことがあるだろうか？」と。しかし考えても考えても、なかなかこれといった事例は出てこなかった。

候補となるエピソードをひとつも思い出さなかったわけではない。多くの愛情を注いで育ててくれた親、本気で叱ってくれた先生、私の得意なことを言語化してくれた上司……。様々な顔や情景が浮かび、これら多くの方々のお陰で今があるのだと改めて感じたし、自分が関わった人の状況がよくなっていった場面を目の当たりにした記憶も、あるにはあった。しかし、私にはどうしても、ピンポイントで「この関わりがこんな風に、自身や他者の良い未来につながった」と自信をもって言えるエピソードを思い出すことができず、しばらくの間、何か課題をかかえている感じの、すっきりしない日々を過ごしていた。

■贈与という概念を知る

そんなある日、とある本との出会いによって、まさに私の目から鱗が落ちた。その本とは、教育者であり哲学研究者である近内悠太氏の著書、「世界は贈与でできている」。フランス出身の社会学者、文化人類学者であるマルセル・モース著「贈与論」の「贈与」という概念について分かりやすく記してあると知人が勧めてくれた本だ。

「贈与」という概念をあえてひとことで表すならば、「お金では買えないもの」ということになるらしいが、全体を通して私が理解した印象では、語感よりも、もっと温かくて、良心的で、尊いものという印象だ。本文の引用を読んでいただければ、もう少しイメージしやすいだろうか？

～以下本文より抜粋～

- * 贈与は贈与だと知られてはいけない。それが贈与だと明らかにされてしまうと、返礼の義務を生み出してしまふ
- * 贈与は差出人に「届いてくれるといいな」という節度を要求する。そして受取人が「すでに受け取っていた」と気づいた時には贈与は完了してしまっている
- * 僕らはいつも他者からの善意を見落としてしまふ。というよりも、愛はそれが愛ならば、見つからないように、気づかれないように手渡される

私はこれらの文章を読んだ時、それまで立ちこめていた濃い霧がいきなり晴れていくような、そんな感覚を覚えた。「あの関わりがあの人未来に良い影響を及ぼした」とまでは言えなくても、「ひょっとしたら、自分が良心から取った言動や行動が、誰かへの贈与となっているということがあるのかもしれない。そうであつたら嬉しいな」ということなら、私にも手渡した覚えがあるし、その倍以上、手渡された覚えもある。

■再度、自分の人生を振り返る

私には息子がいる。心から大切だと思っているし、だからこそ、親である私がいなくなっても、しっかりと自分の足で立って幸せに生きられる大人に育ててほしいという思いから、関わりすぎないように注意したりもしながら育ててきた。そうはいつでも親業は初めてなのだから、間違えながら、学習しながら親業してるからねと正直に伝えて、至らないながらもベストを尽くそうと思って育ててきた。

彼が中学1年生だったある日、ひとりの子から嫌がらせを受けていることをとつとつと語りだした。当然私は心配でたまらなくなったが、「これを将来、良い経験だったと言えるものにするにはどうしたらいいだろう？」と咄嗟に考えた私は、「まずはしっかり寄り添って聴くだけで、あとは彼自身の力を信じて様子を見ることにしよう」という結論に至り、実際にそうした。アドバイスさえもしなかったが、結果、彼は彼自身の力でその状況を乗り越えた。それが集団によるいじめだったり、長

期に渡る場合はまた違っていたのかもしれないが、そのシチュエーションでは、私は目に見える行動は何も取らないということを選択した。その時の私の「ただ寄り添って聴くだけ」という行いは、息子にとっての贈与となり得たでしょうか？

私は複数の仕事をしているが、そのひとつに専門学校
の非常勤講師がある。紅茶の授業を担当しているのだが、学
生には私のもっている全ての技術や知識を伝えたいと思っ
ているし、ひとりひとりが若く、将来のある大切な存在で、授業
で得たことがほんの少しでも自信につながったり、良い影響
を及ぼしたりするのなら、そんなに嬉しいことはないと思って
接している。しかし学生にそんな私の気持ちが理解されてい
る気配はなく、「先生の授業好き」とか「紅茶が好きになっ
た」と直接言ってくれる生徒が嬉しいことに複数いるものの、
恐らくほとんどの生徒は私の名前すら覚えていない。現に廊
下で会った際は常に「あ、紅茶の先生！」と呼ばれる(笑)。
実際私には、彼らの未来にこのように良い影響を与えてい
ると胸を張って言えはしない。では私は何の役にも立たない
虚しいだけの時間を過ごしているのか？といえは、そうではな

いのだと思う。贈った時に感謝されるようなものではないから
こそ、それは贈与となり得るのではないだろうか？

■ 自立型支援方法 14 の項目

自立型支援方法の 14 の項目を初めて知った時、これ
は本当に大切なものだと感じた。しかし、日々これを実践し
ていても、そのことによって明らかに状況が好転したと思える
ことは少ないのではないだろうか？ではそれは無駄なことかと
いえば、決してそんなことはないと言断言できる。こんな思いを
もって関わってくれる人が周りにひとりでも多くいれば、その態
度や言葉は贈与となって多くの人に届いていくのではないだ
ろうか。そしてそれは、多くの人の人生が好転する小さなきつ
かけとなり、小さな救いとなり、温かで安心できるほんの小さ
なかけらになり得るのだと思う。そんな思いを胸に、これから
もよきサポーターになれるよう精進していきたいと改めて感じ
た。
(文責 岡本 陽子)



『自立』を促すための《自立型支援方法》

1. 私は「人はいつも最善を選択している」という前提で人と関り続ける。
2. 私は自分の思い込みを一旦はずし、そのままの相手をしっかり受け止める。
3. 私は相手が尊重されていると思う聴き方をする。
4. 私は相手の中の答えを、効果的な質問で引き出す。
5. 私は評価的な表現でない言葉で相手を承認、認知する。
6. 私はコミュニケーションの意図について、いつも意識を向ける。
7. 私は自分の成功体験、情報を押し付けにならないように提案する。
8. 私は「他人の能力、可能性は決められない」ことを知っている。
9. 私は過去と他人は変えられない、人はみな違う（人は見たいようにみらし聞きたいように聞く）ことを知っている。
10. 私は人間関係を破壊する 7 つの習慣を使わないように意識する。
批判する ②責める ③がみがみ言う ④文句、苦情を言う ⑤罰する ⑥脅す
⑦ コントロールするために褒美でつる
11. 私は信頼関係を構築するために、いつも安心感のある安全な場を作り出す。
12. 私は相手を常に勇気付け、責任を取る権利を奪わない。
13. 私は失敗したと感ずることも、常に学びの種に変える。
14. 私は、いつもどのような時も、自分が世の中に必要な存在であることを知っています。

「NPO 法人マザーズサポーター協会 ニュースレター 第 42 号」をお読みいただきありがとうございました。過去に情報提供のご希望があったみなさまに、送付させていただいています。今後も更に内容を充実させ、育てる側に役に立つ「自立型支援方法」の情報やイベントのご案内などを発信させていただきます。

NPO 法人マザーズサポーター協会 <http://m-supporter.com> fax:078-731-0615

本文イラスト:PIXTA
タイトルイラスト: NPO 法人マザーズサポーター協会 HP

